

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十九年七月十五日(土曜日) 午後六時三十分開演

演目解説(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

狂言 苞山伏(つとやまぶし)

苞は弁当包みのことです。持ち主の山人はこれを枕元に置いて山中で昼寝をしています。朝の早い仕事で眠いのです。長旅でくたびれた山伏も近くで横になりました。そこへ山を越えて使いに行く男が通りかかり、この男も主人に酷使されて面白くない様子です。出来心で弁当に手をつけてしまいました。山人が目覚まして犯人の詮索が始まりますが、疑われた山伏が、狂言の山伏には珍しく言うことに理が通り、真犯人を見事に祈り出します。

能 東北(とうほく)

花の都は梅の花の盛りです。東国方から出た僧一行(ワキ・ワキツレ)が王城東北のとある古寺で和泉式部と称する梅を眺めていますと、一人の女(前シテ)が声を掛けて現れます。寺は上東門院(うへとうもんいん)の旧跡であり、梅の木は和泉式部が植うえ軒端(のきば)の梅と名付けたことを教えて、女は僧に読経を勧めます。式部の名残は色香を増す花や方丈の臥所(ふしど)をはじめ院内の優雅なたたずまいに伝わります。いにしえを偲ぶ女は自分こそこの花に住む梅の主と言いい、木隠きかくれます(中入)。所の者(アイ)から東北院の子細や軒端の梅の由来を聞いた僧は、花の下で終夜法華経を誦して弔います。そこへ式部(後シテ)が現れ、かつて関白道長の譬喻品(ひゆほん)読経に誘われて火宅を出たと詠んだ歌を思い出し、和歌の功德によって火宅を逃れ歌舞の菩薩(ぼさつ)となったことに感謝します。しばらく霊地の四季に仏縁を観想し、梅香る春の夜を舞う式部は、懐旧の涙を恥じ方丈の室を蓮台として僧の夢から遠ざかります。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附

前シテ(里女)
後シテ(和泉式部)

鬘をつけ、鬘帯をしめ、増又は小面の面をかける。
摺箔を着附に着、緋大口をはき、腰帯をしめ上に長絹を着る。

終了予定 午後八時二十分頃